



白浜温泉

住所 姫路市白浜町840-10
 電話 079-245-0375
 営業時間 16時30分～20時30分
 定休日 日曜・水曜定休
 料金 大人420円

女湯には珍しい「お釜型ドライヤー」も

営業は夕方からだが、まきをくべ始めるのは午前中。

改装などで数を減らしつつある「番台」が健在。

女湯の様子。愛好家らの手で張り替えられたタイルの文様が美しい。銭湯ごとに違うという壁の「タイル絵」にも注目。

巻頭特集

そう、今夜は銭湯へぜひ。

冬めく夜に、魅惑の銭湯。

お風呂が好きな日本人。大きな湯船でのんびりと過ごせば、身も心も温まろうというものだ。それが冬ならなおさらのこと。湯気の香りに誘われてくぐるのれんの向こうには、懐かしい世界と、ちょっぴり心温まるストーリー。

戦後生まれの「白浜温泉」

それが浜手の工業地帯に近い地域となると、少し事情が異なる。三代で働く工員や、内風呂がない住宅・公営住宅が多かった地域では、むしろ高度成長期を迎えてから銭湯の需要が増した。人手がいくらでも欲しかった姫路の工場には、奥播磨の山村や閉山が進んだ九州の炭鉱地帯などから、仕事を求めて一気に人が押し寄せたからだ。浜手には、そんな戦後生まれの銭湯がいくつが残る。白浜町で現在も営業を続ける「白浜温泉」もその一つ。開業は1955(昭和30)年頃で、1951(昭和26)年9月から入居が始まった市営白浜住宅の住民に入浴の便宜を図ろうと営業を始めた。

「銭湯女子」とくぐるのれん

さて、白浜温泉を訪れてみよう。場所は、山陽電車「白浜の宮」駅から徒歩で7〜8分ほど。独特の外観は和洋折衷で、正面には「しら」はまの切り文字と切り文字の真ん中に温泉マークが踊る(※表紙写真)。温泉を案内してくれるのは市内在住の宮脇奈奈さん。「古いものが大好きという趣味的なところから地元をはじめ各地の銭湯を巡るようになった」と話す「銭湯女子」だ。

銭湯と「もらい湯」

一般にいう銭湯または風呂屋を正式には「公衆浴場」と呼ぶ。一般家庭に内風呂が普及していなかった高度成長期前夜には、特に東京や大阪などの都会では、歩いて行ける場所に公衆浴場があるのが当たり前とされていた。さて姫路では？旧市街地などでは、やはり銭湯があちこちで見られたようだ。とはいえ都会ほどの軒数をのれんをくぐると番台がある。改装した銭湯や最近のスーパー銭湯では番台を廃止するところも多いが、「ここでは健在。脱衣所の床より数段高く作られ、男湯も女湯も見渡すことができる。すっかり常連の奈奈さんを迎えるのは、店主の山本裕子さん。先代にあたる夫の両親、すなわち義父母から店を引き継いだ。「銭湯の仕事は何も手伝わなくていいから。そう言われて、この家に来ただけだ」と裕子さん。「たしかに手伝えることはなかった。でも家には内風呂がなく、店の風呂に入るのには、なんとなく恥ずかしかったし、新しい家を建てたときにも「内風呂だけは造らんとって」とシャワーだけになったり」と振り返る。

愛好家が救った 廃業の危機

現在、店を切り盛りするのは裕子さん一人。当初は内風呂がなかった市営住宅に風呂場を増築する家庭が増えたことや高層住宅への建て替えが進んだことで、2010年頃には1日の客数が30人ほどに落ち込んだ。「お風呂を楽しみにしてくれる常連さんのために」(裕子さん)と営業を続けたものの、2011年には追い打ちをかけるように、長年使ってきたまき炊きの風呂釜が水漏れを起こすようになった。釜を新しく入れ替える余裕はない。「近所で頑張っていたもう一軒の銭湯も廃業してしまっただけ、白

から銭湯が消えるのは寂しいなという思いもあった」という裕子さんだったが、「水漏れが釜の火を消すほどまでひどくなったらあきらめよう」と決心。廃業は時間の問題だった。

そこへ救いの手を差し伸べたのが、銭湯を巡って楽しむ「銭湯愛好者」たち。釜の入れ替えにかかる費用を安く見積もってくれた業者を紹介するなどして、裕子さんを励ました。

年が明けて2012年。再び裕子さんは決心を固めた。風呂釜を入れ替えて店を続けよう。その矢先に古い風呂釜は息絶えたが、10日間余りの休業を経て釜を入れ替え、愛好家らの奉仕で風呂場のタイルも貼り

「銭湯女子」が語る「湯の魅力」



仕事が終わったら、毎晩でも銭湯に入りたくなります。休日には、大阪や京都などに残る「激洗」レトロな銭湯を巡ることもあります。銭湯はどの店も「一つとして同じ」がないのが魅力。内外装の装飾は、店ごとに個性があり、古いものを大切に使い続けているところも好ましく感じます。もちろん「人」の雰囲気も全然違って、店ごとに肌合いが異なります。女子的には入浴後の化粧直しや風呂道具の持ち歩きが面倒かもしれませんが、そこは工夫次第といったところ。店々を訪れるたびに「世界に一つだけのもの」を見聞きして手に入れることができるとすれば「それくらいはなんのその」です。

が見られず、もっぱら、もらい湯に頼っていたようである。